

沖縄、そして敗戦

●アジア太平洋戦争

南方の資源を獲得することを目的に、自存自衛の名目で日本が始めた戦争である。

※ここまで経緯はDVD『太平洋戦争』第1巻を参照してください。

レジュメもあります。

→ <https://bessho9.info/mov/senso.html#taiheiyosenso>

https://bessho9.info/materials/taiheiyosenso/202410_taiheiyosenso.pdf

1941.12. 8 陸軍、マレー半島に上陸開始(日本時間午前2時)

海軍、ハワイ真珠湾を奇襲攻撃(午前3時25分)

野村吉三郎駐米大使・来栖三郎特命全権大使、ハル長官に最終通牒を手渡す

(午前4時20分)

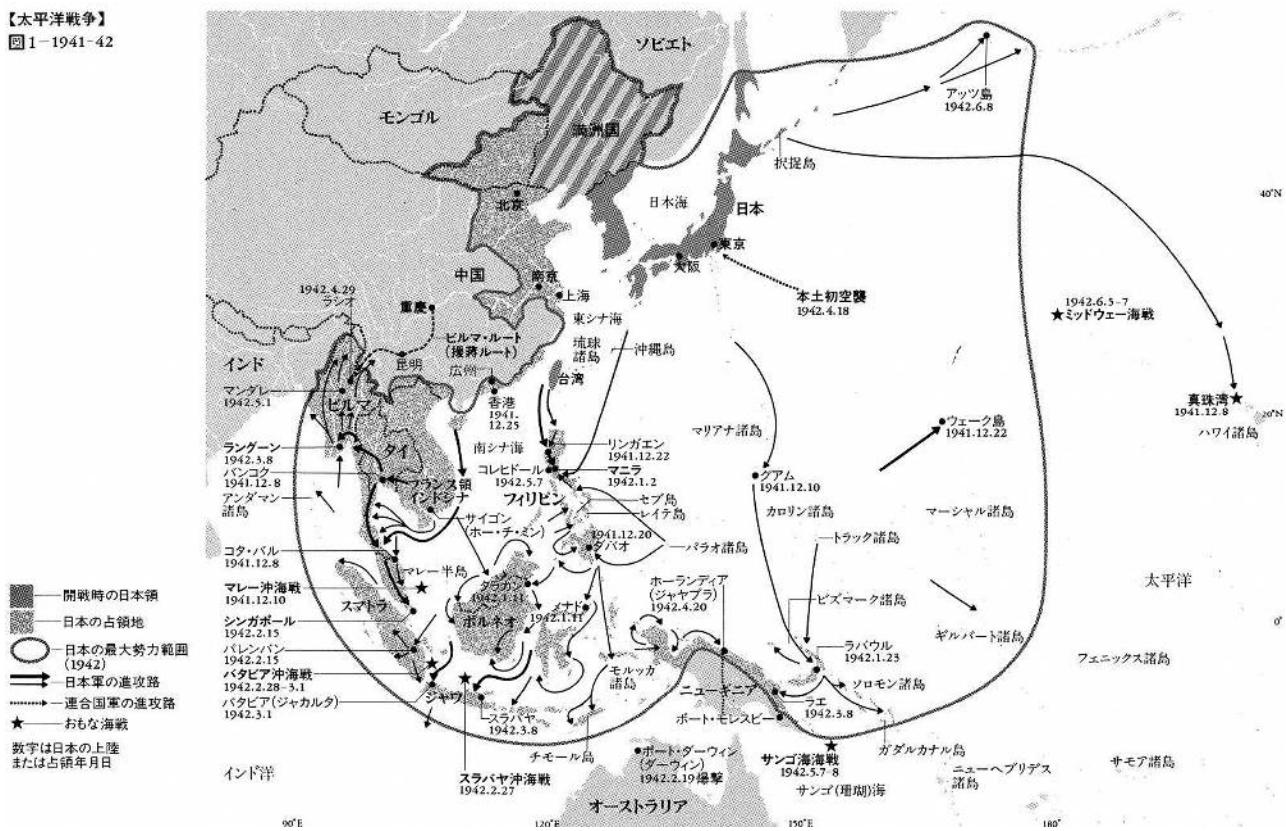
宣戦の詔書発布(11時40分)→日米戦争始まる

米英、対日宣戦布告

12. 9 中国、日独伊に対して宣戦布告

12.11 独伊、米に対して宣戦布告

【太平洋戦争】
図1-1941-42



●戦争の経過

1941.12.10 マレー沖で英東洋艦隊の戦艦「プリンス・オブ・ウェールズ」および
巡洋戦艦「レパルス」を撃沈

1942. 2.15 シンガポールの英軍、日本軍に降伏

4. 9 フィリピンのバターン半島を制圧 「死の行進」で捕虜17,200人死亡
5. 7 フィリピン全島を占領
- 4.18 米空母発進のドゥーリットル中佐率いる16機のB-25が東京・名古屋・神戸を空襲
5. 1 ビルマのマンダレーを占領
6. 5 ミッドウェー海戦(主力空母4隻を喪失) → 戦局転機

●連合国軍(アメリカ)の反攻



1942. 8. 7 米軍、ソロモン諸島ガダルカナル島に上陸 → 米軍の反攻開始
1943. 2. 7 ガダルカナル島撤退(戦死者・餓死者2万8千人) → 大本営は「転進」と発表
- 2.23 陸軍省、「撃ちてし止まむ」のポスター5万枚配布
- 5.12 米軍、アリューシャン列島アツツ島に上陸
- 5.29 アツツ守備隊2,500人全滅 → 大本営、初めて「玉碎」と発表
- 9.30 御前会議、「今後執るべき戦争指導大綱」決定 → 絶対国防圏設定
- 10.21 學徒出陣
- 10.25 泰緬鉄道が完成(連合軍捕虜1万6千人、アジア人数万人犠牲)
1944. 6.15 米軍、マリアナ諸島サイパン島に上陸
7. 7 サイパン島守備隊3万人玉碎
- 6.16 中国基地の米B-29、初めて北九州を空襲
- 7.21 米軍、グアム島に上陸
- 8.11 グアム守備隊1万8千人玉碎
- 7.24 米軍、マリアナ諸島テニアン島に上陸
8. 2 テニアン守備隊8,100人玉碎

- 8. 5 大本営政府連絡会議、最高戦争指導会と改称
- 9. 7 中国・雲南省拉孟の日本守備隊1,400人玉碎
- 10.12 台湾沖航空戦、大本営は大戦果を発表。事実は大敗
- 10.20 米軍、フィリピンのレイテ島に上陸
- 10.24 レイテ沖海戦、連合艦隊は事実上消滅 → 南方との海上輸送路失う

※ここまで経緯はDVD『太平洋戦争』第2~9巻を参照してください。

→ <https://bessho9.info/mov/senso.html#taiheiyo센so>

●本土決戦の計画

大本営は日本本土で敵を迎撃つ**本土決戦**を計画
 決戦を準備が終わる45年秋に定める
 時間稼ぎをして準備期間をなるべく確保する
 台湾、南西諸島(沖縄)、小笠原諸島、千島列島で持久戦を行い敵の戦力を消耗させる
 ↓
 国民一人一人が兵士となって戦うことが求められる
 「一億玉碎」のスローガンのもと、アメリカ軍に立ち向かう

- 1944.11.24 マリアナ基地のB-29約80機、東京を初空襲。
- 1945. 1.20 帝國陸海軍作戦計画大綱(陸上防衛戦の準備)
 　　國体護持のために松代大本営を建設
- 2. 4 ヤルタ会談(ルーズヴェルト、チャーチル、スターリン)2月11日まで
 　　ドイツの戦後処理、ソ連の対日参戦決定
- 2.14 近衛文麿が天皇に対して早期終戦を上奏
 　　← 昭和天皇「もう一度戦果を挙げてからでないと中々話は難しいと思ふ」
- 2.19 米軍、硫黄島に上陸
- 3.26 硫黄島守備隊2万人玉碎
- 3.10 B-29による**東京大空襲** 燃失家屋23万戸、死者約10万人
- 4. 1 米軍、沖縄本島に上陸
- 4. 7 沖縄水上特攻出撃の戦艦「大和」沈没
- 4.12 ルーズヴェルト大統領死去 → トルーマン副大統領が昇格
- 4.30 ヒトラー、ベルリンの地下壕で自殺
- 5. 7 独、連合国に無条件降伏
- 5.14 最高戦争指導会議、ソ連の仲介で戦争終結を図る方針決定
- 6. 8 天皇臨席の最高戦争指導会、本土決戦の方針を採択
- 6.23 沖縄守備隊の組織的戦闘終結 戦死9万5千人ほか一般市民10万人死亡
- 7.10 最高戦争指導会、ソ連に終戦斡旋依頼の近衛文麿特使派遣決定
- 7.17 ポツダム会談(トルーマン、チャーチル、スターリン)8月2日まで
- 7.26 ポツダム宣言
- 7.28 鈴木貫太郎首相、ポツダム宣言黙殺と談話
- 8. 6 広島に原爆投下
- 8. 8 ソ連、日本に宣戦布告
 　　翌日、満洲、朝鮮、樺太に進攻開始
- 8. 9 長崎に原爆投下
- 8. 9 御前会議

- 8.10 国体護持を条件にポツダム宣言受諾を決定。スイス等を通じて連合国へ申し入れ
 8.12 日本の降伏条件に対する連合国の回答公電着く
 　→ 天皇と政府は連合国最高司令官に隸属
 8.14 御前会議、ポツダム宣言受諾決定。中立国を通じ連合国に申し入れ
 8.15 正午、戦争終結の詔書を放送(玉音放送)
 8.16 スターリン、北海道北部占領を公式提案 ← トルーマン拒否
 8.18 内務省、占領軍向け性的慰安施設(RAA)設置を指令
 8.28 連合国軍先遣隊、厚木に到着。連合国総司令部GHQ設置
 8.30 連合国最高司令官マッカーサー元帥、厚木に到着
 9. 2 戦艦「ミズーリ」艦上で降伏文書に調印

●本土爆撃、原爆投下

B-29…アメリカ陸軍の長距離爆撃機

爆弾搭載量:9,072kg 最高速度:644km/h 航続距離4,865km 上昇限度:12,375m

開発に4年と30億ドル(当時の日本の国家予算の半分以上に匹敵)

日本の無力化を企図

日本の空を縦横無尽に飛び、各地に爆弾・焼夷弾を投下、多くの都市を焼き尽くす



中国成都を拠点に北九州(主たる標的は八幡製鐵所)を爆撃

サイパン、グアム、テニアン占領によって日本全土が作戦区域になった

当初は軍事施設、軍需工場を標的に、高高度昼間精密爆撃

写真偵察により、ドイツに悩まされた高射砲が日本にはほとんどないことを確認

戦果薄い高高度昼間爆撃から低高度夜間爆撃に変更

硫黄島占領によってP-51戦闘機による護衛が可能になった

M69焼夷弾による無差別の都市爆撃

日本本土は戦場と化し、国民も前線の兵士と同じように敵の攻撃にさらされることになった

広島、長崎に原爆投下



B-29による爆撃(米国戦略爆撃調査団による統計)

延べ出撃機数	3,401機
作戦中の総損失機数	485機
作戦中の破損機数	2,707機
投下爆弾	147,576トン
搭乗員戦死数	3,041人

●「鉄の暴風」沖縄戦

1944. 8.22 疎開船「対馬丸」、米潜水艦の魚雷攻撃を受け沈没。1,484人死亡

10.10 米機動部隊艦載機、那覇を中心に沖縄本島全域を空襲

1945. 3.25 米軍、慶良間列島への艦砲射撃開始

3.26 米軍、慶良間列島へ上陸

4. 1 米軍、沖縄本島読谷に上陸

5.22 守備隊司令部、首里から摩文仁の洞窟に移動

5.29 米軍、首里を占領

6.13 小禄の海軍司令官太田実少将自決

6.18 ひめゆり部隊などの女子学徒隊の多数が死亡、生き残った者の多くも自決

6.22 司令官牛島満中将、長勇参謀長が摩文仁の壕にて自決

組織的戦闘は終わったが、8月15日以後も戦闘は続いた

両軍の司令官による停戦がなされなかつたため



沖縄戦の実相

- ・一般住民が避難していた島尻部に軍が撤退したため、住民を戦闘に巻き込むことになった
- ・本土の兵士が理解できない沖縄方言を禁止し、使った者をスパイ扱いして殺害
- ・住民が避難していたガマ(壕)を軍が横取り
- ・軍と隣り合って存在したため、住民は否応なく軍に関する情報を知ることになる
- ・住民に投降されると不利になるので投降を許さなかった
- ・負傷兵は青酸カリ注射や手榴弾自決で始末
- ・牛島満司令官が自決の際に「各々陣地に拠り、所在上級者の指揮に従い、祖国のため最後まで敢闘せよ(中略)生きて虜囚の辱めを受くることなく、悠久の大義に生くべし」と最後までの抵抗を命じたため、戦闘停止が実現しなかった
- ・軍人戦死者よりも多い住民犠牲
 - 一般住民=約9万4千人、県出身の軍人・軍属=約2万8千人、
県外出身の日本兵=約6万6千人、米軍=約1万3千人
- ・1,000人以上の強制集団死
 - 軍による強制、皇民化教育の影響 → 「集団自決」という言葉が適切ではない理由
- ・そもそも本土決戦のための時間稼ぎ、沖縄を捨て石に見立てた作戦だった

●私たちが問いかねるべきこと — アジア太平洋戦争とはなんだったのか？

日本の軍人、民間人あわせて約310万人の犠牲者。

それにまさるアジア、連合国の犠牲者。

満洲からの引き揚げ、シベリア抑留、帰還できず残留させられた人たち。

認定されない被爆者、放置されたままの遺骨、命令に従って戦犯とされた人たち。これらの中には朝鮮・台湾出身者も含まれる。

この戦争を、誰が、どのようにして決定したのか。その責任を、誰が、どのようにしてとったのか。
体験者は減り、生存者の記憶も薄れていく。→ 伝承だけがたより。教育の役割をどうとらえるか。
被害意識にくらべ、加害意識は持ちづらいという事実。

父親が戦死した。夫や息子が帰ってこなかった。家が焼かれた。食べ物や薬がなかった。そうした自分の身に起きた被害体験は鮮明だが、遠い海の向こうで同じような体験をした人がいることを認識するには想像力が必要になる。

8月になると、テレビで原爆投下など戦争末期の特番が組まれる。しかし、この結果をもたらすことになった歴史がとりあげられることはほとんどない。満洲事変が起きた9月、日米開戦の12月こそ、日本国民が真剣に考えるべき時なのではないだろうか。

この悲劇をくり返してはならないと考えるなら、そのために必要なことは何であるか。

本土空襲や沖縄戦に関する書籍はたくさん出ていますが、ここでは基本的で読みやすい、手に入れやすいことを勘案した上で、数点をあげておきます。

- ・早乙女勝元、『東京大空襲：昭和20年3月10日の記録』、岩波新書、1971年。
- ・半藤一利、『15歳の東京大空襲』、ちくまプリマー新書、2010年。
- ・大江健三郎、『ヒロシマ・ノート』、岩波新書、1965年。
- ・沖縄タイムス社編、『沖縄戦記 鉄の暴風』ちくま学芸文庫、2024年。
- ・林博史、『沖縄戦 なぜ20万人が犠牲になったのか』、集英社新書、2025年。

そのほかにも、子ども向けの本から専門書、漫画やアニメ作品、映画、ドキュメンタリーなど数多くあります。別所憲法9条の会の『映画コレクション』や『ブック・コレクション』の中でも紹介しておりますから、参考にしてください。